

寛永諸家譜

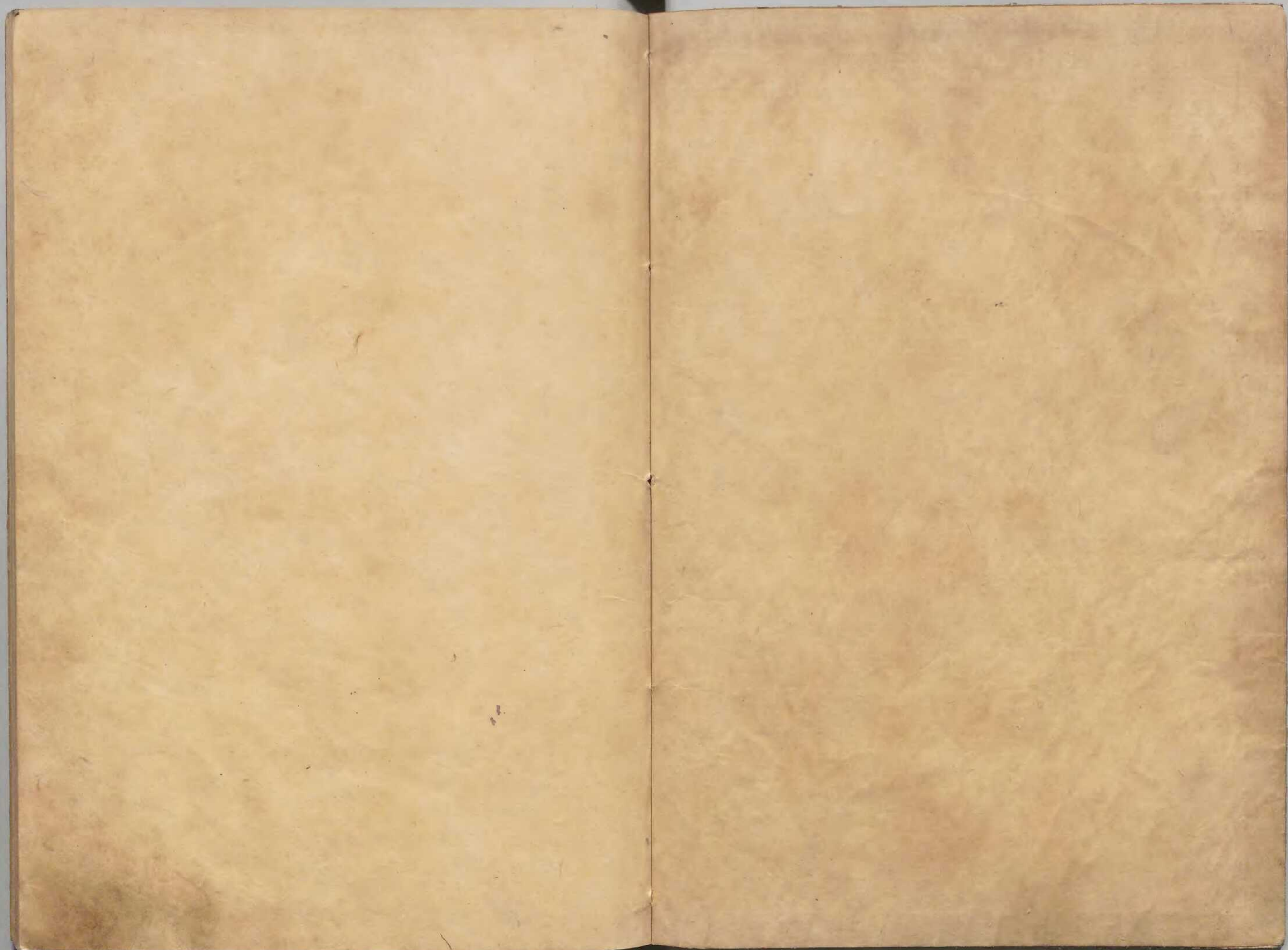
藤原氏  
交流  
癸亥五冊之内四

117

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (117)		
函號	行	76	1







小お

門意

伊奈

松子

約本根

小野

國領

小泉

寛永徳家系図傳

藤原氏

葵田

支流

小お

● 正重

又郎左衛門

先祖累世尾張國中村又佐

淺草文庫



秀政 いであき

基<sup>もと</sup>たね<sup>ね</sup>の<sup>の</sup> 従<sup>したが</sup>ふ<sup>ふ</sup>位<sup>ゐ</sup>下<sup>げ</sup> 播<sup>は</sup>磨<sup>ま</sup>守<sup>もり</sup> 尾<sup>お</sup>張<sup>はり</sup>四<sup>よ</sup>

中<sup>なか</sup>村<sup>むら</sup>又<sup>また</sup>生<sup>なま</sup>取<sup>とり</sup>

寄<sup>よ</sup>臣<sup>しん</sup>秀<sup>ひで</sup>吉<sup>よし</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>一<sup>いつ</sup>室<sup>むろ</sup>ら<sup>ら</sup>よ<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>

幼<sup>わか</sup>少<sup>せう</sup>ふ<sup>ふ</sup>一<sup>いつ</sup>と<sup>と</sup>秀<sup>ひで</sup>吉<sup>よし</sup>よ<sup>よ</sup>つ<sup>つ</sup>よ<sup>よ</sup>秀<sup>ひで</sup>吉<sup>よし</sup>と<sup>と</sup>下<sup>した</sup>

一<sup>いつ</sup>統<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>大<sup>だい</sup>坂<sup>さか</sup>丸<sup>まる</sup>城<sup>じやう</sup>よ<sup>よ</sup>い<sup>い</sup>海<sup>うみ</sup>沿<sup>え</sup>ふ<sup>ふ</sup>時<sup>とき</sup>

泉<sup>いづみ</sup>列<sup>りゆう</sup>岸<sup>がん</sup>和<sup>わ</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>城<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>終<sup>はつ</sup>り<sup>り</sup>之<sup>の</sup>美<sup>み</sup>石<sup>いし</sup>と<sup>と</sup>

領<sup>りやう</sup>知<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>

慶<sup>きやう</sup>長<sup>ちやう</sup>九<sup>く</sup>年<sup>ねん</sup>三<sup>さん</sup>月<sup>げつ</sup>廿<sup>にじゅう</sup>二<sup>に</sup>日<sup>にち</sup>大<sup>だい</sup>坂<sup>さか</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>く

六<sup>む</sup>十<sup>じゅう</sup>又<sup>また</sup>年<sup>ねん</sup>ふ<sup>ふ</sup>一<sup>いつ</sup>と<sup>と</sup>卒<sup>すつ</sup>と<sup>と</sup> 法<sup>はう</sup>名<sup>な</sup>日<sup>にち</sup>政<sup>せい</sup>

吉政 よしあき

小<sup>こ</sup>方<sup>ほう</sup>次<sup>じ</sup> 信<sup>しん</sup>濃<sup>のう</sup>守<sup>もり</sup> の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>大<sup>だい</sup>和<sup>わ</sup>守<sup>もり</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>

生<sup>なま</sup>回<sup>かい</sup>日<sup>にち</sup>お<sup>お</sup>

文<sup>ぶん</sup>禄<sup>ろく</sup>二<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>従<sup>したが</sup>ふ<sup>ふ</sup>位<sup>ゐ</sup>下<sup>げ</sup>よ<sup>よ</sup>叙<sup>ぎよ</sup>し<sup>し</sup>信<sup>しん</sup>濃<sup>のう</sup>守<sup>もり</sup>に<sup>に</sup>

任<sup>にん</sup>じ<sup>じ</sup>

播<sup>は</sup>磨<sup>ま</sup>國<sup>くに</sup>跡<sup>あと</sup>野<sup>の</sup>の<sup>の</sup>城<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>海<sup>うみ</sup>沿<sup>え</sup>り<sup>り</sup>二<sup>に</sup>百<sup>ひやく</sup>石<sup>いし</sup>



の地と領と

ほ又但列あるの城より引きて二百

と領と

秀政率してのち播磨守と領と

東照大権現の鈞令より父秀政を

臨岸相田の城と秀政はたまはつと

秀政が嫡男秀英は八右衛門の城と領と

享長十八年秀政は十九歳ふり

率に 法名乾堂元公

秀家

遠江守 生國播磨

秀吉ははくく恒久佐下り

一領地を名とす

享長五年石田治部が揚三威謀叛

のとき後兵三百人と討つひく

關東はたむじくこのとき

大権現と松原勝と征し給ふ

ゆへ



大権現おほごんげんは信守のぶしゅにて下野しもつけ國くに小山こやまよ

いさむらそのらち三成さんせい御ご津つ津つ守しゅのさき

又また關原せきがはらは信守のぶしゅに關原せきがはら没落ぼつらくのち

泉列いづみり岸和田きしわだよを城しろとて長岡原ながのがはらの

落人おちひと長岡原ながのがはら部べ元親もとちか兵船へいせん二百艘にひゃくさうと

泉列いづみり石津いしづよりしれき陸くわより

あづらと豊坊とよぼうと秀家ひでゆけは事こととて

是これと返治へんぢせんがころよ兵士へいし三百人

といまひく岸和田きしわだより石津いしづより

いさむら一教いちけうして長曾根部ながそねべが姫ひめと

討捕うちはとそのかり首級くびぎとえうり砂すな

堂どうとすれはらば兵船へいせんよりのり

志こころりぞく秀家ひでゆけが共ともありひハ戦死いくさひ一

ありひもきざとをりぬるものも又

おかり

大権現おほごんげんを切きと賞しょうして領地りやうぢあるとく

きほふばとて一族いっしやく大坂おほさかよありと志こころり

といはとも秀家ひでゆけが志こころよりてしれを



ゆりさね

慶長八年三月廿五日大坂よりいへ  
卒に 法名了俊

三尹

大隅守 生國丹波

いさげなふしをいへる秀家の子  
とあり実を播磨守秀政の子あり  
すべし秀頼より

慶長八年

大権現の鉤巻とうけいへり従ふ位  
下

同年秀家卒去のとき三尹

領地二子といへり

同九年実父秀政卒

大権現の位よりて秀政が領地二子と  
と秀政よこすよそのころ三尹を  
ハ子ふれ領地とくへり



一萬石を領に

慶長十四年

大権現の御命とてけりまはり

台徳院殿よりけりまはり

お度れ御陣よりけりまはり

お軍家の御陣よりけりまはり

東乃郡をけりまはり

重号

基右郎 抄列よりす

秀家が娘子とけりまはり

けり

長十郎大隅守三尹が御身とけり

江戸よりとけりまはり

台徳院殿よりお湯よりけり

み十人の御技術よりけり

お度れ御陣よりけりまはり



元和六年ろくごうくろくごうろくごう御殿ごてんとほむ  
寛永元年十二月廿四日にじゅうよっぴつ切米きりまいと御賜ごみづかひを  
同十年

御軍家二百名の領地りやうちとくくく御所ごしよ  
とべく七百石と領知りやうち一内田うちのの佐治さぢと  
正伝ただつたが領りやうち一内田うちのの佐治さぢの妻つまと  
ほむむ

重政しげまさ

牛右衛門うしゑもん

重明しげあき

平三郎へいざぶろう

巖谷いわや

又郎左衛門またざゑもん

有棟ありむね

与平次よへいじ

元和六年



台徳院殿

將軍家にお祝儀——くまひる

某

可助

某

汰吉

尹貞

越中守

元和六年

台徳院殿

將軍家にお祝儀——くまひる

寛永二年

將軍家の御よりて清小性總の書

とほとりぬ切米とくまひる

翌年

將軍家に入浴のときさ信を以

日八年清小性と形を以てぬ側らく



つゝくまひ

日九年領地五百石とて

日十二年十二月後み位下と叙

日十二年九月二九歩行の

あむく領地とく

と領

某

右馬助

某

左兵衛

三明

自後

寛永六年より紀伊大納言

りつゝくまひ

某

右馬助



某

右門

尹明

甚左衛門

寛永九年

お軍家よ許湯いひま——くまひぬ

同年大久保左馬允おほくべさ領うりは属しゆ——小姓

領うりの番ばんとつやじ

同年海切米とくさぬん

女子

多野尾内記たのしほが書

女子

織田修理亮おだのしゆりが書

同十七年六月十七日狼藉ろうじやくの徒二人あり

く三尹さんいんが門内かどうちに討入うちいれ尹助いんすけ相戦あひま則收すなは二人

と殺害ころに尹明いんめい八ヶ所やつか所の疵きずとありぬ

び事こととやまよ道みち——くさけれく

も醫師いしやと信しんつけら禮療れいじやう治ちとくさ



如子

三枝内近が書り

吉英うい

大和守 やまとのり 母と伊东掃部いとうのりが女むすめ

文禄二年七歳ななさいして位い下したに叙なす

右京大夫うきやうだいに任たづじ

寛長十七年かんちやうしちしちねん廿六歳ふたじゅうろくさい乃すなはち大和守やまとのりに

任たづじ

同十八年どうじゅうはちねん父吉政ちちきちせい卒すしてのり

右徳院殿うきとくゐん岸和田きしのとの城しろとたよりる領地りやうぢと

のこし

同十九年どうじゅうくねん乃すなはち大坂陣おさかじんのとき

大権現

右徳院殿うきとくゐんの鈞かみ命のみことといふありと才と吉親ちちよしちかと

おれどくえといふ寺てらによむきの岸和田きしのとにか

勝かちりてかぬ因幡いんぱん守もりといふしらといは

まましし松平まつだいら阿波あわ守もり小條こじょうお羽守はねもりといふ



ら致そのくち瑞鶴とくこむのちう  
作とくあり大蛇修理が嫡子伝徳  
と何げあつた和睡のちこれとく  
元和元年大坂事件のとき岩和田  
乃に加勢として金本おまき伊東掃部  
よりびり合中伝濃守若親岩和田  
の援兵あり  
同年四月廿九日大蛇道軒一万余人と  
いきしく岩和田の城を陥ふその見

ふる首三万餘人といきひ山とまり  
道とくく清和但守長晟と泉列  
櫻井あり相戦主馬首敷あり  
道軒も又兵とくくつゆけとく  
敵數十騎と討死  
曰み月うり大坂の敗率七百餘人を  
くら殺は日八百景磨山をとりひき  
右徳院殿と并錫にこのとき  
いそく泉列境の満りより北常



といまーり大坂の落人といふこと  
とぬり

えわふ年春和田とつらと但列あるの  
城ーーりぬ

寛永十年堀尾山城守卒しては

十一月

お軍家の作とつげぬり在田吾助が堀  
池田出雲守といか雲隠夜友國り  
をことむき城番といはら惣一年八月

よりいさくつら

同十四年京極若狭守忠高卒して

のら相立年正月古田兵部が堀尾丹

能守とい又か雲隠夜友國城番

とつらりく同年三月より

同年六月高野山大塔寺造りの

とき戸川吉佐守とたあーく 信と

ありこれとあつら



吾親

射馬守

母八日

慶長三年九月某乃とき秀吉此命

ノ一ヨリク位又位下ノ叙一カ等也

又位は

同八年十月某ノ一テ位徳守一

特任トそのヨリ位下ノ叙一カ等也

大権現

台徳院殿ノすみえノ一ノ一ノ一

同十年

台徳院殿ノ軍宣下此ト一ノ一ノ一

奉成行ト一

同十五年ト野田ノ一ノ一ノ一

二ノ一ト一ノ一

同十八年父吾政率ト兄吾英ト一ノ一

乃城ト一ノ一ト吾親ト一ノ一

キト一ノ一

同十九年大坂此一ノ一ノ一



天皇寺によびふ時小親を 佐とやゆりて  
京橋にあらびよ大截造と見分る

大権現より佐久馬河内守小栗又市と相立られ  
台徳院殿より山田十次右衛門尉作を

くはくらおあにといひて道海と見分  
益番とほくらして跡ぞ

元和元年春和田の加勢とれりて五月廿  
七日大坂北落人二百余人と討れそ乃  
うら藩回が才大野が一族と何のともまこ

兄若英と境の浦よりゆき落人成  
あらしこむ

同六年但列がふとつる丹波より  
うりる所然の負教ととのごとく

寛永三年海陽二條の亭より 行孝  
のとき射る守より将但しと佐藤と勅

同十年二月壬午徳道の山田のとき  
幕下の士十八人とあらひ給ひ六方より

わららつハさる若親とよび城織部



徳勢のせ小十郎せうじやうハハムははむナなウうビびニに鴉あヤやウう  
リりスすテて聖せい年ねん二に月げつノの切きりととりり魚いさな島しまと  
ははりりくくくくままじじぬ

吉成よしかず

本もと之の劔けん 抄しょう列りゅうノのままりり 母ははハハ日ひ

元和元年十之某あして

白徳院はくとくゐん殿のりノの謁ごうノのままじじぬ

寛永元年二十一年あより

右軍家みぎぐんけノのつつくくくくままじじぬ

女子

母ははハハ日ひ 加か友ゆう友ゆうとと大だい吉きちノのままじじぬ

女子

母ははハハ日ひ 松まつ平へい下げ総そう守しゅノのままじじぬ

家紋けもん 額がく内ない二に八はちノの字じ

秀政ひでまさノの添そ紋もん 一いち重かさね梅うめ

秀家ひでいえノの紋もん

三尹さんいんノの紋もん









門系カネ

●  
直友ナカトモ

又郎大夫 中國チノクニ遊ユ江カハ

今川義元イマカワノヨシノブよつふ 七十六ナナジュウロク歳トシ行ユク

紀キ法名等ホウナトウ專セン







宗勝 むねかつ

助左衛門尉 生國曰前

遠列濱松えんりつ へんしょうよりさひく

大権現よりはくくまのまのりまを授

台徳院殿

右軍家よりはくくまのまのりまを授

寛永十一年九月十日八十歳

ゆきと死す

法名淨室よきむろ

宗家 むねいえ

半兵衛 生玉曰前

大権現よりはくくまのまのりまを授

慶長十一年城列伏見よりさひく

二十九歳ふくまのまのりまを授 法名玉安たまやす

宗次 むねつぐ

三郎右衛門尉

生國曰前



享長十七年

大権現より人々をくまひる

元和二年

台徳院殿よりつるくまひる

同八年駿河定番とほむ

寛永十一年

お軍家よりつるくまひる

勝正

三十郎

宗次が貴子とあり美を小栗十郎

子あり

宗忠

六代忠の尉

生回長秀

台徳院殿よりつるくまひる

寛永元年三十二歳ありて死す

法名相次



重忠 しげたけ

助之丞 生國回前

寛永十一年より

將軍家より侍之りしより

重元 しげもと

太郎兵衛尉

勝重 かつしげ

助左衛門尉 生國氏孫 むくにのうぢ

慶長十五年十一月十六日 けicho

右徳院殿より侍之りしより

將軍家より侍之りしより

勝元 かつもと

傳七郎

政勝 まさかつ

越兵衛 生國氏孫 こし



慶長十八年

台徳院殿より信久より大坂

度の清陣より信春と信とむ

寛永九年より

將軍家より信久より信春

忠久

百助

寛永十年六月十五日

將軍家より信久より信春

同十八年六月大御番より信春

重冬

新大坂門尉

直勝

若右衛門 生國を以

大権現

台徳院殿



お軍家よつとくまひる

寛永十年六月三日七十一歳に

死す 法名金珠

未勝

又た藩の尉 生國長院

慶長十九年

大権現にお湯一

台徳院殿

お軍家よつとくまひる

貞次

半右衛門尉 生國駿河

寛永九年

お軍家よ湯一

家紋 丸の内意乃







伊家いけ

● 忠基ちゆき

市兵衛尉 生回之河にがは  
廣忠卿ひろちゆ 了しやう 法ほふ 久く 小碓こづ の城しろ 主ぬし と 成なり

忠家ちゆけ

又兵衛尉 生回之河



小嶋の城主とあり

忠次

坂又佐下 備前守 生田回舟

忠政

筑後守 生田遠江

東照大権現よりつらつらとくまひり  
之列の小嶋本領よりいなりこれと

お銀

慶長十三年坂又佐下と叙す

忠治

半十郎 生田良茂

忠公

兵衛 生田回舟

忠重

又右門 生田回舟  
幼少ふしそ 後河大納言忠重と御す



はら

寛永十三年十二月うされく

將軍家よお湯たぎ

同十二年又百衣此領地りやうぢ

御書院ごしやういん書とほとむ

忠勝ちゆうしやう

半はん左さ忠ちゆう尉じゆう 生せい四し回かい前ぜん

忠清ちゆうせい

半はん左さ忠ちゆう 生せい四し回かい前ぜん

忠重ちゆうじゆう

半はん三さん郎らう 生せい四し回かい前ぜん

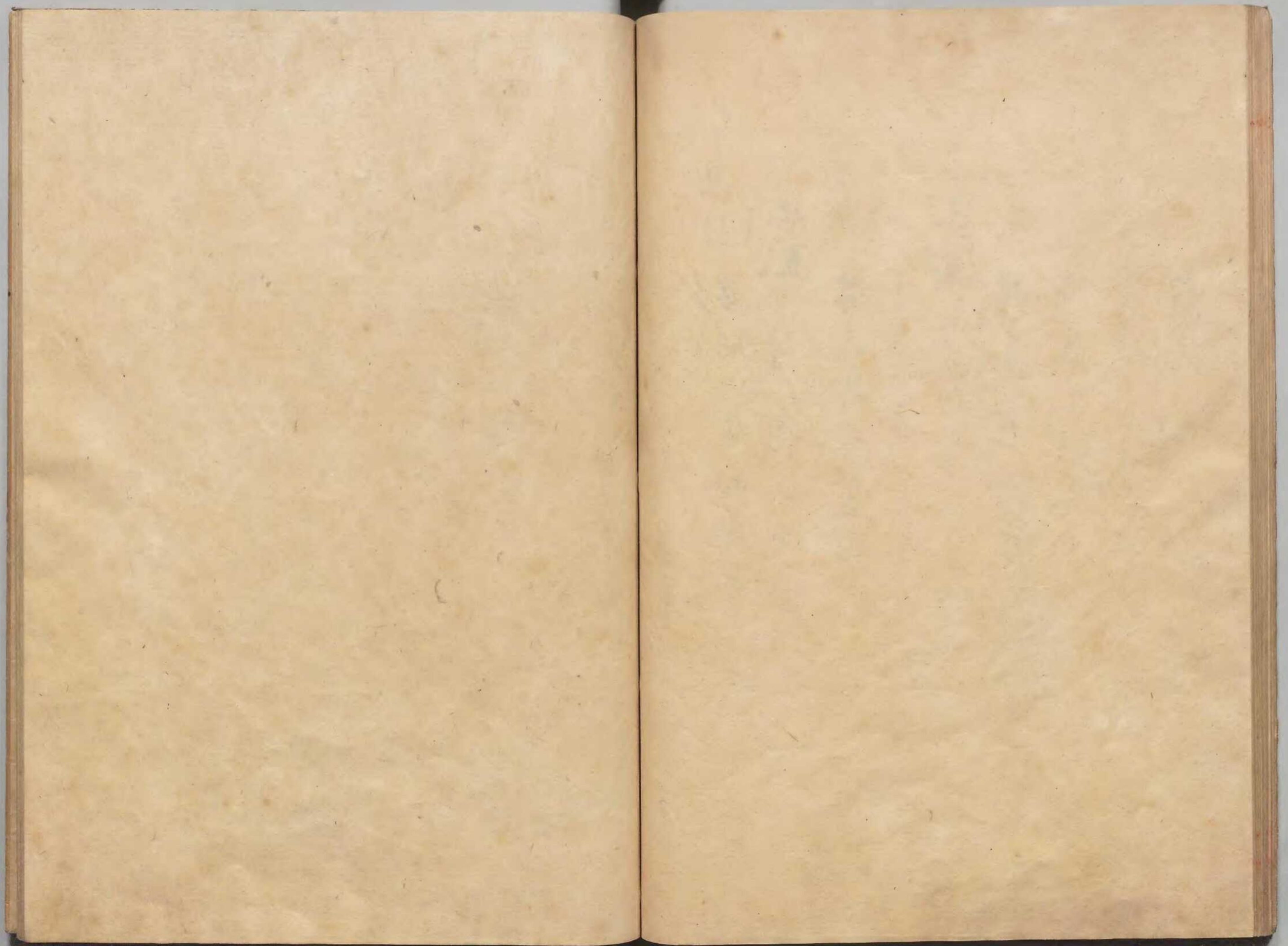
忠隆ちゆうりゆう

德とく茂しやう 生せい四し回かい前ぜん

家紋

丸まるの内うち二に次じ左さ巴は







● 集

猪子 いのこ

久<sup>きう</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>尉<sup>ゑい</sup>  
いん 犬<sup>いん</sup>山<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>城<sup>じょう</sup>主<sup>しゅ</sup> 織<sup>お</sup>田<sup>た</sup>十<sup>じゅう</sup>郎<sup>らう</sup> 左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>尉<sup>ゑい</sup> 信<sup>のぶ</sup>清<sup>きよ</sup>  
 了<sup>りょう</sup>



増み位下 内近臣 生四日前  
 織田信長より一時十八歳の時  
 赤鯉の役より水舟の役を任され  
 入りて久しくも又黄鯉の負よりれ  
 たり物鮮陣より木とびくそのら  
 東照大権現より洋湯と  
 寛文五年關原陣より信長より

首級と持よりの大坂おなじの陣  
 大権現より信長より赤鯉とれり  
 増み位下  
 台徳院殿より信長より  
 台徳院殿より赤鯉とれり  
 台徳院殿より信長より  
 台徳院殿より赤鯉とれり

寛永三年二月二十八日八十八歳



武列ぶりゅうといひく死しを 法名ほふな栖す還えん

一日いちにち

次つぎ左ひだり清きよ門かど尉ゑい 生なま回まわ日ひ前まへ

慶きやう長ちやう十じゆ九く年ねんりりさされれく

大おほ権けん現げんとと并ならししくくままのの大おほ坂さかのの後ご

御ご陣じんにに侍さむらひ奉ほうじじ

大おほ権けん現げん薨こう御ごののららりりさされれく

右みぎ德とく院いん殿でんととおおししくくままのの糧りやう米まいと

寺てら師しよよ

元もと和わ三さん年ねん十じゆ月げつ十じゆ日にち廿にじふ八はち日にち亥がい武ぶ列りゅう

いいとといいくく死しを 法名ほふな植うゑ林りん

正次まことつぎ

久ひさ左さ門かど尉ゑい 生なま回まわ日ひ前まへ

慶きやう長ちやう三さん年ねん

右みぎ德とく院いん殿でんいいとといいくく死しを

同どう五ご年ねん美み田でんななびびはは關せき原げんのの陣じん

いいとといいくく死しを



同十七年十月十九日二十八歳にして  
死す 法名常法

正元

久世東門尉 生回氏翁

慶長十八年正月十九日

台徳院殿より御湯へ父正次が家督と

許さそのころ大坂あは陣の儀と

つとむ

元和九年正月二十八日

將軍家より許さるる御湯

一巻

左大支 生回加賀

寛永二年御され

將軍家より御湯

同元年御小姓組の番と許さる

同六年御切米と許さる



月十年  
仲かとろうろうろうろ切米と領地  
ふかととと且ろ御加増と洋場と

家紋  
龜甲こも



利政

約本根

右近

生國陸奥

是よりさき教代を以てのまゝに

ていざと松原清とていふそのら

浪人

慶長六年伏見をひくうて



東照大権現よお湯と

同七年 釣命とつけし海軍 奥列

岩城よをともしき法事と少法一校

一岩城と高居た京亮よ渡とけ

少と奥列とを村よとひく倉邑

三千石とし海軍又 作よよりてとを整

の近郷六石の海代友とけとむ

同十九年

台徳院敷の作とつけし海軍の族炮同心

六十人とあがり大坂あ夜の津陣よ

信存はそのらとを整とあらし下野

小細方一をひく三子石と銘と

寛永十二年七月廿二日江戸ふく死と

八十二歳

政次

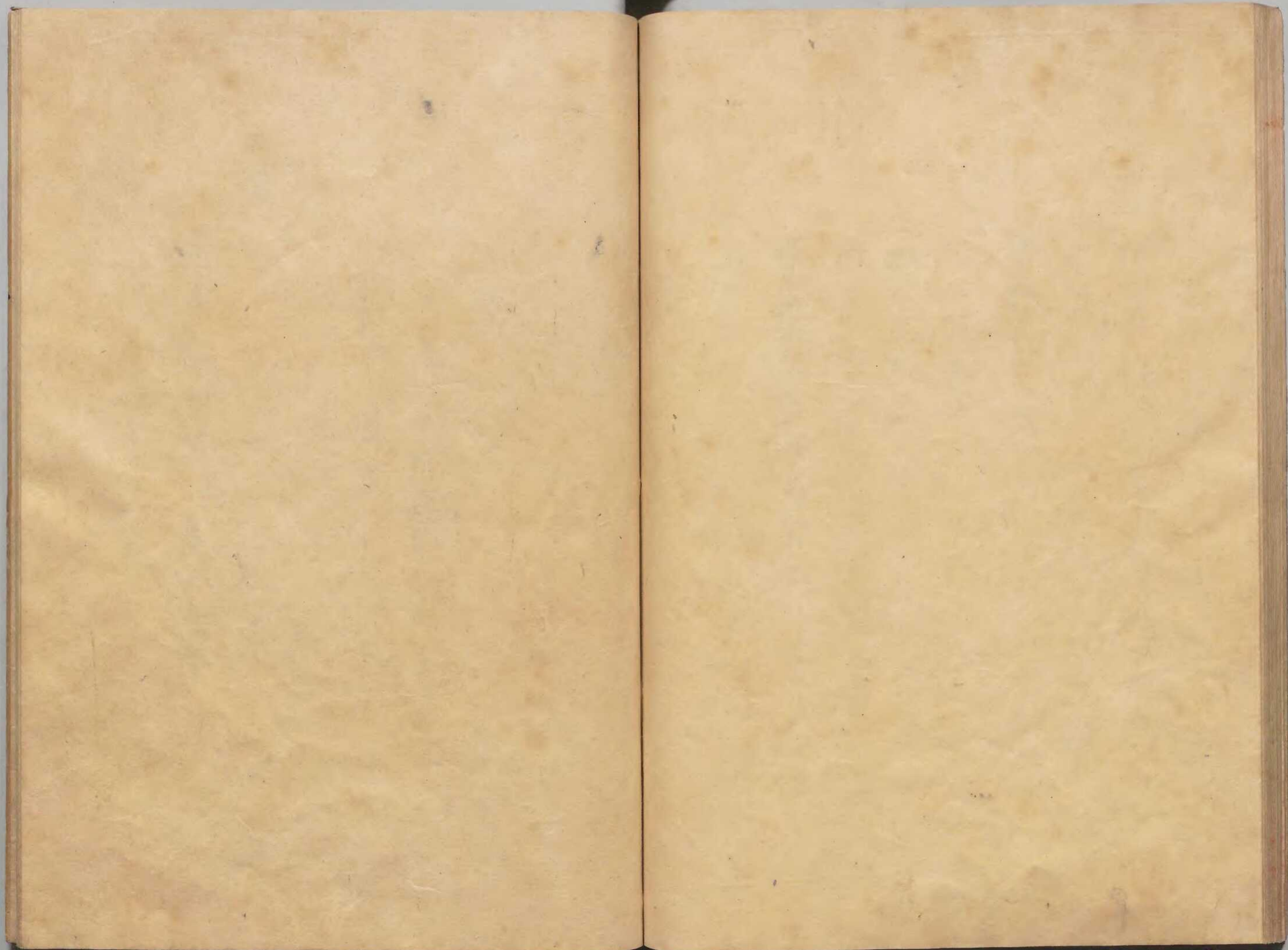
長次郎 生國同家

利政が長子とありて実ハ利政が姪なり











●  
室あけ

清子よしみ神去かみ依より

生回なまぐる安房あへ

里見さとみ安房あへ守まもりつふ

小野おのの

本もとを清子よしみ神氏かみうぢ忠明ちゅうめいああららくくここららて

小野おのと梅うめは



忠明 ちゆうめい

次郎右衛門

生國日記

東照大権現とくと湯ゆ——くまひり

高たか命のみこととわらふ

右徳院殿うでとくゐんりしきくまひり

右明うでめいとわらふこがえん神典しんてん胎たと号ごうと

のり

大権現おほごんの約命やくのみこととまうて母ははの氏うぢと冒をうして

小こ号ごうと号ごうは

右徳院殿うでとくゐんりしきくまひりいなかの字なと

きりゆり

忠常 ちゆうじょう

次郎右衛門

生國いこく日記にっ記

將軍家しやうぐんよほふりしきいさしち領地りやうち八百石と

たまはれ



家紋

劍菱けんびょう



四領くわんりやう

家傳けだんといふく元祖げんそを後列ごりやうの任人にんじん  
 高橋たかはし権政けんせいの源頼朝みなもとのよりとものとき富士ふじ  
 の権攝ごんせつをいひく麻一あさひち頭かぶと射取いひと  
 物ものこ種たねと賞あかしして江列えりやう神崎かみさきの  
 郡ぐんをきほりりて依よる本末ほんまつより  
 属まがし神崎郡かみさきぐん内本領村うちほんりやうむらの城しろより  
 辰たつみより高橋たかはしと改あらためて四領くわんりやうと称なづけ



政者

孫三郎

生國近江

依こまよはしく江列の内玉村と

領とあるとき依こまが命とふけて

伊庭某と追討のやまこ某は肥前

少つよとのとを刀おろしこひり

戦死と

一巻

孫一郎

後半兵衛と号す

生國同前

父政者討死の後一巻幼年ふして

浪人と号し江列を去て丹羽某に奉り

長秀よはしくそのらを長秀次り

つよ

文禄四年よるおくれ

東照大権現よつよとすつり江列軍



郡八田村と接す

享長又年小山陣岡原陣の侍

一そのら大坂と河陣の侍以後

台徳院殿

お軍家よりつとまり侍り大坂番

つとむ

寛永八年に死す七十歳 法名常休

吉次

七郎右衛門 生國同前

元和六年に死す

台徳院殿より侍り大坂番

米とすまわり大坂番と侍り

お軍家より侍り大坂番

ありて父一右衛門と侍り

甲賀郡の内八田村と接り

侍り大坂番の侍り

長村ありて領地とす



光る

吉澤

本兵衛 生國氏

寛永十三年十二月吉澤十七歳にて

將軍家より賜へし

次光

金孫

生國氏

次長

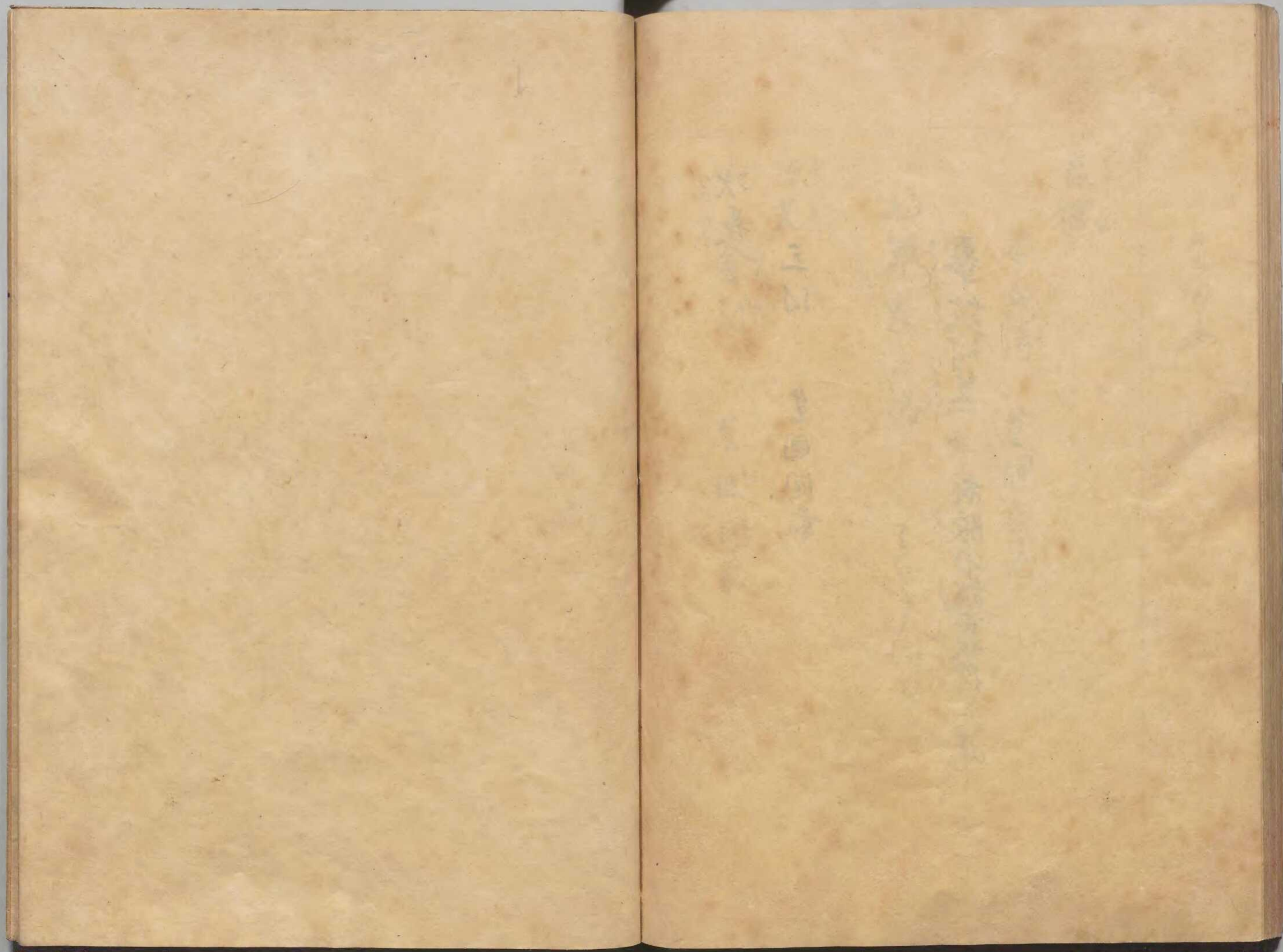
三孫

生國氏

幕紋竹笠

衣服の紋藁荷乃丸







● 吉次

小泉

ト 大 丈

生 國 駿 河

教 代 今 川 家 又 属 吉 次 氏 真 子

氏 子

天 正 十 九 年 乙 未 年

东 照 大 権 祝



台徳院殿ニ賜<sup>タマヒ</sup>一<sup>ヒト</sup>くまの御<sup>ミコ</sup>衣<sup>イ</sup>

安永六年氏列<sup>ウヂノタテ</sup>楠毛川<sup>クシノカハ</sup>碇<sup>イカリ</sup>の代友<sup>ダイトモ</sup>

と仰<sup>オホシ</sup>つこのとき吉次<sup>ヨシジ</sup>新親<sup>ニシン</sup>よりと

引<sup>ヒキ</sup>く新田<sup>ニクダ</sup>と開<sup>ヒラ</sup>敷<sup>シ</sup>せん事<sup>コト</sup>と云<sup>イハ</sup>と

せーと云<sup>イハ</sup>ふりしれはらぬ思<sup>オモ</sup>ひ

と下<sup>シタ</sup>し給<sup>たま</sup>はるこもみやうに成<sup>な</sup>る積<sup>つみ</sup>

乃<sup>すなは</sup>切<sup>ち</sup>と終<sup>は</sup>そのら是<sup>こゝ</sup>と賞<sup>しょう</sup>しぬ

本<sup>ほん</sup>領<sup>りやう</sup>此外<sup>このほか</sup>田<sup>でん</sup>新<sup>しん</sup>田<sup>でん</sup>のうらに

十分<sup>じふぶん</sup>一<sup>いち</sup>とね給<sup>たま</sup>はる安永<sup>あんえい</sup>六年<sup>ごくねん</sup>より元<sup>げん</sup>和<sup>わ</sup>

又<sup>また</sup>年<sup>ねん</sup>より及<sup>およ</sup>びし代<sup>しろ</sup>友<sup>とも</sup>とほむる

長<sup>なが</sup>く十九<sup>じゅうく</sup>年<sup>ねん</sup>なり

元<sup>げん</sup>和<sup>わ</sup>九年<sup>ごくねん</sup>十二月<sup>じふにがつ</sup>に病<sup>びやう</sup>死<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>八十<sup>はちじゅう</sup>又

法<sup>ほふ</sup>名<sup>な</sup>宗<sup>そう</sup>可<sup>か</sup>

吉<sup>よし</sup>勝<sup>かつ</sup>

勤<sup>きん</sup>九<sup>く</sup>郎<sup>らう</sup> のら次<sup>つぎ</sup>を更<sup>さら</sup>と号<sup>なづ</sup>け 生<sup>なま</sup>回<sup>まわ</sup>

冬<sup>ふゆ</sup>河<sup>が</sup>

吉<sup>よし</sup>次<sup>つぎ</sup>やうなひく子<sup>こ</sup>とに実<sup>まこと</sup>ハ新<sup>しん</sup>母<sup>ぼ</sup>



善七重緒が子なり重緒生國冬河  
鳥居右衛門元忠が郎從とあり  
寛長二年五月に死すと承久十八法  
淨慶

寛長十七年善緒とどりし

台徳院殿より後久くくまひりし小姓  
の番とつとむ

同十九年元和元年大坂あなりの御陣  
より侍奉に

元和六年 叡者とのりし若次が跡と

はぎとつ代友とありし累負とつり

さとしとつと十年より善次くは承久代友

不仕芳海一とありし地とつと

御馬平二海ありし

寛永六年八月三十日累病して病死

法名道法



吉 纒いさぶ

平三郎 次大夫 生國甲斐

吉勝が姪あり吉勝実子いさぶるきいすい

より督いとして家督いとほいぐいーいむ

吉勝死いしいくいはい河内代友いあるいじいよ

領地いと没収いせいるい家

寛永八年より大河内い金兵衛尉い久纒い小

属いしい河内代友いとついといむ

同十六年

為命いといりいゆいりい久纒いよ

かいらいりいくい氏列い相い生い忠いのいらいよいと

ひいてい河内代友いといほいといむ

家紋

丸いの内い蝶い



